

2024年度 第4回公立大学法人大阪経営審議会議事要旨

日 時： 2025年3月26日（水）13時00分～14時00分

場 所： UR森之宮ビル3階 公立大学法人大阪役員会議室（大阪市城東区森之宮1-6-85）

※Web会議システムを併用して実施

出席者： （外部委員）生野委員、池田委員、上田委員、上山委員、尾崎委員、土屋委員、鳥井委員、比嘉委員

（内部委員）福島理事長、辰巳砂副理事長、酒井理事、東山理事、櫻木理事、高橋理事、重松理事、中村理事

（オブザーバー）帯野理事、藤沢理事、藤本理事、白井監事、前田監事

【審議事項】

1. 2025（令和7）年度予算（案）について

東山理事より説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

<ご意見等>

（土屋委員）

病院経営に関して、収益面の追求については病院の医師等に対しては慎重に扱った方がよいのではないかと。医師等は厳しい現状を踏まえ収益が大事だと言う事は十分に理解していると思う。病院に対してストレートに「稼げ」というのを方針とする事は如何かと思う。先ず良い医療を提供し併せて結果として収支を大事にするという事を基本としたら良いと考える。

DXの部分について、病院は13億円だが、大学は7,000万円だけの予算計上となっている。

（東山理事）

病院経営については厳しい財政状況という部分もあるので最大限努力をお願いするが、モチベーションを下げないように病院経営陣が配慮していく。政策医療にかかる経費については運営費交付金を増加しようという動きもあるので、そういった病院の取り組みについては、一定支援をいただけるよう法人として努めていく。

（中村理事）

病院経営は厳しい状態になっており、物価、委託費の高騰、人件費ベースアップによる影響が非常に大きい。それに対して収入は、いかに高度な医療をしても保険診療の範囲でしか診療報酬は請求できないので、どの病院も苦勞している。運営費交付金などは可能な範囲でご考慮いただければありがたい。

（東山理事）

病院のDX推進にかかるのは13億8,000万円、法人・大学はOMU戦略予算として積極的に投資するという意味では7,000万ということで計上しているが、それ以外にも一般予算でのDX推進戦略として情報戦略部などがマンパワーも含めて計上することで取り組む。資料上のDXに関する金額は、戦略的投資する分の経費と理解いただきたい。また、次期の基盤システムの構築も今年度からスタートしており、15億円を予算計上している。こうした取り組みでDXを進めていく。

（高橋理事）

4 ページでいくと、補助金事業の地域中核特色ある研究大学強化促進事業 4 億円の中に研究部分の DX を進めるといふ部分で別途 5,000 万円程度予算を組んでいる。DX 推進課を新設し、IT 企業からの出向人材を確保して DX を推進する体制整備も進めている。

(土屋委員)

DX は非常に大事で、取り組むべき課題であり、大学部門は色々な質の向上のために予算を計上してできる範囲で進めていけばよい。病院に関しては 2025 年度に 13 億円を使ってもほとんど収入が立たず、経費だけが 13 億円発生する事になる。非常に厳しい経営状況を踏まえると、当然実行段階では精査して、順を踏んで優先順位を決めるといった取り組みが必要なのではないかと。

(福島理事長)

まずは戦略投資をするという考え方である。すぐ来年効果が出るかは別として、患者ファーストを前提にしながら投資効果を出すということを議論している。

また、土屋委員がご心配いただいた点は、中村理事(病院長)が高いレベルでのバランスを取りながら病院経営をやっていることをご理解いただきたい。

(尾崎委員)

次年度に大阪公立大学の 4 年生が卒業するが、そのことに関連する予算措置は計上されているのか。それとも何もやらないのか。

(高橋理事)

完成イベントなどの実施は考えていない。学士課程としては来年度が初めての卒業ではあるが、我々としては最初の 4 年はスタートと位置付けており、新しく都心のキャンパスも完成して、さらに発展していく中の 1 つのメルクマールだという意味に捉えている。

(辰巳砂副理事長)

卒業の際に歌う歌もないというご意見が出たので、大学歌の説明をさせていただきたい。大学歌の制作は開学前から懸念されており、新入生が入ってきてからの検討することとしていた。1 年前に大学史担当の山東学長特別補佐らと進め方を協議し、全学的に歌詞・曲を募集した。23 件の応募の中から大学歌 1 曲、学生歌 3 曲を選出し、今週の学位記授与式で披露した。1 年かけて来年新大学の学生が旅立つときに、みんなで歌える形にしていけるよう準備を進めていく。

(上山委員)

補助金事業や全学事業といった記載が一部の資料では記載方法が異なっていてわかりにくい。事業内容を書くのであればそれで統一した方がよい。

【報告事項】

1. 2025 年度役員体制について

酒井理事より説明がなされた。

<ご意見等>

特になし。

2. 入試志願者状況（速報）について

高橋理事より説明がなされた。

<ご意見等>

（尾崎委員）

大学の入試改革の中で、総合選抜、たとえば指定校という中に高専を入れることはできないか。高専としては競争力がつくと思う。

（高橋理事）

森之宮および中百舌鳥キャンパスの移転に合わせて、高専と大学との連携を強化するためのワーキングを立ち上げている。現時点でも高専から本学への推薦入試枠はあり、毎年一定数の学生が進学してきているが、今後は入試制度の在り方にとどまらず、教育・研究の両面でより密接な連携を図っていきたいと考えている。

具体的には、共用研究機器の基盤センターを設置して、そこで高専生をアルバイトやリサーチ・アシスタント（RA）、インターンシップなどの形で受け入れる制度を整備するなど、同一キャンパス内となることを生かして、高専生が大学の授業を一部履修し、進学後にはその履修内容を単位として認定するような仕組みについても検討を進めている。それらと合わせて、推薦の入試枠や、実施時期といった入試制度についても現在検討が始まっている。ぜひやってみたいと思っている。

（土屋委員）

この数年間を含めて2025年度の大学入試の全体像をどう捉えたらよいか。

（高橋理事）

この3～4年間の入試に関しては、全体として上出来と考えている。その理由として、大阪公立大学という新しい日本最大の公立大学ができたということで認知度が大きく向上したことが挙げられる。また、授業料無償化なども話題に上がる機会も多く、特に昨年度は志願者数が落ちてもおかしくないところが上がり、今年度についても、ほぼ同じ状況を保っている。予備校などでの実際の人気はもっと高く、受けたい学生は数字以上に多いと思っている。

一方で、現状に安心してはいけない。1つには少子化で受験生、18歳人口が減少していくこと。また、新大学ということでインフレ的になっているところもあること。学生が卒業時点で満足し、卒業後に社会から評価されて、本当に入学して良かったということを発信してもらえることを目指す必要があり、今と同じようにやっていたらいいとは考えていない。

また、総合型選抜は一定増やしていきたい。大学内の分析をすると、一般入試以外からの入学者の方が少し成績が良い。偏差値で選ぶ一般入試に対し、総合型選抜で最初から本学に志向性を持った学生を集めるような仕組みを早期に確立していく必要がある。すでに入試改革で特別選抜のための問題作成を進めており、次期中期計画期間中に始めたいと考えている。

現在の比率は、18%程度であるが、最終的には30%程度まで上げたいと考えている。

（土屋委員）

昨年度、相当PRに取り組み、予備校の情報を入れたりして分析していく取り組みは来年度も継続してより高いレベルを維持していこうという方針か。

(高橋理事)

その分析等は継続していく。予備校との連携だけでなく、入学後の成績等を含めた入試種別ごとの細かい分析をしていく。

(尾崎委員)

次年度から学士課程の卒業生が出てくるが、卒業生の組織化というのは校友会の方で進んでいるのか。

(東山理事)

組織率が高くなかったが、ネットワーク化を図るため、今年度OMUネットを構築しており卒業生らの加入促進に取り組むこととしている。こうした枠組みを強化し、これは寄付金獲得という取組でもあるが、応援団を増やしていく。

(帯野理事)

新聞発表と実際の出願率の数字がかなり異なるが、その原因は何か。新聞の誤り等はなかったか。

(高橋理事)

新聞に出た時点以降に到達する出願もあるので、若干数値は変わる。

(藤沢理事)

女子枠については是非検討いただきたい。どのように枠をつけるかは、入試を面接だけにするやり方もあれば、一定数に奨学金を出すというやり方もある。大阪府下に限るという方法もあるので議論の必要がある。地域大学であればあるほど、地域が性別に関係なく活躍できる土壌を作るという意味で、女性が一定割合入ってくることを加速させるというのは重要である。

生活科学部などは男性が少ないので、逆に男性枠をつけても悪くない。世の中の的には非常にメッセージ性があると思うので、女性の優遇だけではなくて、大学として本当にダイバーシティを目指していることを示す意味では、男女両方の枠を試みるというようなことも御検討いただきたい。

(高橋理事)

女子枠については既にかなり検討している。うまくいっている大学は、入試だけでなく入学後のケア、出口まで含めた組織化がきちんととできているが、単純に入学枠を設置した大学はその後志願者が減ったりもしている。

一般入試に比べ、早めに安心したいということもあってか、推薦入試は工学部でもかなり女子割合が高い。さらに女子枠も地域との関係ということを大事にしてうまく設ければ良いと思う。

(福島理事)

前回だったか、土屋委員が仰っていたように、入り口と真ん中と出口と、一気通貫にやるのが大学の魅力づくりと、競争力強化につながると思う。女子枠についても高橋理事の言う通りだと思うので、検討を進めていきたい。

以上